

主 題：嘘は罪である

聖書箇所：ヤコブの手紙 5章12節

5：12「私の兄弟たちよ。何よりもまず、誓わないようにしなさい。天をさしても地をさしても、そのほかの何をさしてもです。ただ、「はい。」を「はい。」、「いいえ。」を「いいえ。」としなさい。それは、あなたがたが、さばきに会わないためです。」

「しかし、何よりもまず、私の兄弟たちよ。」と原語を直訳すると、このように始まるこの12節のみことばですが、ヤコブは「しかし」ということばをもって話題を変えようとします。そして、「私の兄弟たちよ」と語りかけることによって、クリスチャンたちに、自分の兄弟姉妹たちに対してこれから大切なことを語ろうとしていることを見て取ることができるのです。これまでも繰り返されてきたメッセージ、これまでも彼が読者に強調してきたメッセージ、それらを5章になって、彼は再びその大切なメッセージを彼らに伝えようとするのです。

12節でヤコブは「してはならないこと」と私たちが「すべきこと」、そして、その理由について教えるのです。

☆私たちクリスチャンは何をしてはならないのか、何をすべきなのか、どうしてすべきなのか？

1. してはならないこと

「誓わないようにしなさい」とヤコブは最初に教えます。この「誓い」ということですが、私たち日本人もよく何かに誓って話をすることがあります。私の言うことは本当だ、天に誓って！とか、何々に誓ってもいいと言って話すことは、私たちも経験することです。この「誓う」ということすべてが神の前に罪かという決してそうではありません。というのは、「誓う」ということを神は教えておられるからです。たとえば、旧約聖書の申命記、新しく約束の地に入ろうとしているイスラエルの民に対して、モーセが大切なことを教える中で、彼はこのように言っています。申命記6：13「**あなたの神、主を恐れなければならない。主に仕えなければならない。御名によって誓わなければならない。**」、また、10：20にも「**あなたの神、主を恐れ、主に仕え、主にすがり、御名によって誓わなければならない。**」と、このように記されています。ですから、これを見ても誓いというものがすべてまちがっている、すべて罪であると聖書が教えているのではないことが明らかです。実際に、約束の地に斥候が出て行きました。そして、約束の地でラハブというひとりの女性とこの斥候たちが出会ったところがあります。ヨシュア記2章にあります。2：11「**私たちは、それを聞いたとき、あなたがたのために、心がしなえて、もうだれにも、勇気がなくなっていました。**」とラハブが斥候たちに告げるのです。つまり、彼女は神がイスラエルとともに歩まれ、そして、イスラエルを通してすばらしい偉大なみわざを為したこと、敵がことごとく滅ぼされたということを聞いていました。そして、続けてこのように言います。「**あなたがたの神、主は、上は天、下は地において神であられるからです。**」、あなたがたの信じている神は真実な方だから、どの神々も太刀打ちすることができないと、そこで、彼女はこのように言います。2：12「**どうか、私があなたがたに真実を尽くしたように、あなたがたもまた私の父の家に真実を尽くすと、今、主にかけて私に誓ってください。そして、私に確かな証拠を下さい。**」と。斥候たちは彼女にこう言います。2：14「**あなたがたが、私たちのこのことをしゃべらなければ、私たちはいのちにかけて誓おう。主が私たちにこの地を与えてくださるとき、私たちはあなたに真実と誠実を尽くそう。**」と、そして、このラハブとその家族はその難から逃れることができたのです。この際も誓いを立てたのです。

また、神ご自身も誓いを立てられたと記されているところがあります。アブラハムとのできごとのことです。神はアブラハムに約束を与えられました。それはアブラハムをとおして子孫が増え広がって行くということです。その約束を神がアブラハムに与えるのですが、その件に関して、ヘブル人への手紙6章で、このヘブル書の著者はこのように教えています。13節から「**神は、アブラハムに約束されるとき、ご自分よりすぐれたものをさして誓うことがありえないため、ご自分をさして誓い、：14 こう言われました。「わたしは必ずあなたを祝福し、あなたを大いにふやす。」：15 こうして、アブラハムは、忍耐の末に、約束のものを得ました。：16 確かに、人間は自分よりすぐれた者をさして誓います。そして、確証のための誓いというものは、人間のすべての反論をやめさせます。：17 そこで、神は約束の相続者たちに、ご計画の変わらないことをさらにはっきり示そうと思い、誓いをもって保証されたのです。**」、私たち人間がするように、自分の言っていることが真実であると証明するために誓いを立てる、神にそのようなことは必要ないのです。神が言っておられることはすべて真実であり、過ちがない以上、それが真実だとわざわざ誓う必要はありません。しかも、私たちが誓いを立てるとき、私たち以上の存在を用いて、何々にかけてとか、天に誓ってとか言い

ますが、神は神以上の存在はいないからご自分を指して誓ったと言うのです。このように「誓い」そのものは罪ではないのです。誓いは間違っていなかったのです。

しかし、禁じられている「誓い」もあるのです。実は、どちらかという、この読者たちの間にあった問題はここに関連しているのです。レビ記 19：12を見ると「**あなたがたは、わたしの名によって、偽って誓ってはならない。あなたの神の御名を汚してはならない。わたしは主である。**」と教えています。今も見て来たように、誓いはどのようなときにしたのかというと、自分の言っていることが真実であることを主張するときです。この読者たちは、自分の嘘を信じさせるために誓いをういていたのです。彼らは神を引き合いに出して、神を証人にして人を騙していたのです。これが大きな問題だったのです。つまり、誓いを立てるときは、それがいい加減なものであってはならないということです。誓ったことはそれを守るという大きな責任があります。民数記 30：2にこのように記されています。「**人がもし、主に誓願をし、あるいは、物断ちをしようと誓いをするなら、そのことばを破ってはならない。すべて自分の口から出たとおりのことを実行しなければならない。**」と。ですから、ヤコブがこの手紙を書いたとき、この読者たちの問題は、自分たちが守ろうとしていないことを誓いをかけて宣言していたのです。彼らは自分たちの偽りをあたかも真実であるかのように誓って見せたのです。神の名を使ってそのようなことをしていたのです。これは大きな罪です。十戒の中に「**あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。**」（出エジプト 20：7）とあります。「**主の御名を、みだりに唱えてはならない。**」、これは自分の虚栄のため、虚偽のため、偽りのため、悪のために神の名を用いようとする、それをしてはならないと言ったのです。なぜなら、気をつけていないと人間はそうにするからです。自分の偽りのために神の名を用いる、そのようなことを彼らはしていたのです。彼らの問題は自分の嘘を信じさせるために神の名を使った、彼らの心の中には言っていることを守ろうとか、言っていることが真実かどうか試したときそれは真実でなかった、語っていることが真実でないし、語っていることを守ろうともししていない、このような状態にあったことです。実は、この当時、悲しいことに、このような間違っただけの誓いというもの、頻りに立てられていたのです。だから、ヤコブはそのことを警告したのです。

12節には「**何よりもまず、**」とあります。特に、とりわけ私はあなたたちにこのことを伝えておきたいのですとヤコブは言います。このことばは I ペテロ 4：8にも出て来ます。「**何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。**」、たくさんのことを教えたけれど、その中でも最も大切なこと、最もあなたたちに教えたいこと、それが実はここに記されていることだと私たちはみことばの中に見るのです。間違っただけの誓いを立ててはならないと。これがしてはならないことです。

では、すべきことは何でしょう？これらはみな関連していますから続けて見て行きましょう。

2. すべきこと

してはならないことは「偽りの誓いを立ててはならない」ことでした。「すべきこと」をヤコブはこのように言います。「**天をさしても地をさしても、そのほかの何をさしてもです。ただ、「はい。」を「はい。」、「いいえ。」を「いいえ。」としなさい。**」と、つまり、すべきことは「いつも真実を話しなさい」とヤコブは言うのです。「**「はい。」を「はい。」、「いいえ。」を「いいえ。」としなさい。**」とは、事実に基づいて、一貫して答え続けて行きなさいということです。答えが「はい」ならずっと「はい」だ、「いいえ」ならずっと「いいえ」であると、真実に基づいて話しているのだからそのように語り続けて行きなさいと言うのです。イエスも実は、山上の説教の中でそのことをお話になりました。マタイ 5：33-37を見ると「**さらにまた、昔の人々に、『偽りの誓いを立ててはならない。あなたの誓ったことを主に果たせ。』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。：34 しかし、わたしはあなたがたに言います。決して誓ってはいけません。すなわち、天をさして誓ってはいけません。そこは神の御座だからです。：35 地をさして誓ってもいけません。そこは神の足台だからです。エルサレムをさして誓ってもいけません。そこは偉大な王の都だからです。：36 あなたの頭をさして誓ってもいけません。あなたは、一本の髪の毛すら、白くも黒くもできないからです。：37 だから、あなたがたは、『はい。』は『はい。』、『いいえ。』は『いいえ。』とだけ言いなさい。それ以上のことは悪いことです。』とあります。だから、イエスが教えられたこと、また、ヤコブが言ったことは、あなたの責任はそうにして自分の偽りを言い続けるような生き方ではなくて、いつも真実を語ること、そのようにしていなさいと、そのことを言ったのです。というのは、私たちの語ることばは非常に重大なものです。私たちが何を話すかということは大切です。ことばによる罪ということをヤコブは私たちに繰り返し教えてくれました。1：19「**愛する兄弟たち。あなたがたはそのことを知っているのです。しかし、だれでも、聞くには早く、語るにはおそく、怒るにはおそいようにしなさい。**」、よく考えてから語りなさいということです。よく考えないで語ってしまって、後から考えてみるようなことをもしあなたがしているなら、ことばでいっぱい失敗を犯しているということです。私たちの失敗はそこにありませんか？言わなくてもいいことを言ってしまったと、後になってから気付くというようなことです。あなたが話**

すことばに最善の注意を払いなさいと言っているのです。そして、その後に「怒るにはおそいようにしなさい。」とあるのは、「怒り」と「ことば」は関連しているからです。そのことをヤコブは私たちに教え続けてくれたのです。この「怒り」は外に向かって怒りを発するというより、心の中で、心の奥深いところでくすぶっている怒りであると言います。もし、私たちがそのような怒りをもっているなら、間違いなくそれはいろいろなかたちをとって出て来ると言うのです。話すことばに注意を払うことと同時に、いやそれ以上に、心に注意を払わなければならないと言います。同じ1：26では「**自分は宗教に熱心であると思っても、自分の舌にくつわをかけず、自分の心を欺いているなら、そのような人の宗教はむなしいものです。**」と教えました。「**自分の舌にくつわをかけない**」、言いたいことを言っている、それは間違っていると言います。ことばで罪を犯してはいけないと警告しました、悪いことばをいっさい口から出してはいけないと。クリスチャンとしてふさわしくない会話であったり、兄弟姉妹の成長を妨げるようなことばは、口から出してはならないというのがヤコブの教えです。それを聞くと私たちは耳が痛いのです。なぜなら、そのようことばはすぐに出てしまうからです。彼は言います。神の前に価値のある宗教と価値のない宗教とはどのようなものかと。兄弟姉妹の悪口を言い、批判して、怒りをもっているような、そういう人を外部の人が見たときに、その人の内に神の栄光を見ることができのでしょうかと言います。その人が私は神を信じています、私は罪赦されて天国へ行けますと言っても、周りの人々は何の魅力も感じないのです。そんな宗教は空しいと。私たちがこの聖書から教えられたことは、神が私たちを生まれ変わらせてくださって、私たちは新しい目標をもち、新しい生きがいを持って生きる者へと変えられたことです。私たちは失敗を犯しますが、新しく変えられて行きたいし、神に喜ばれる者へと変えられて行きたいと望んで生きているのです。そして、それを実現させてくださるのは神の恵みです。神に依存して生きて行くことで神が働いてくださり私たちを変えてくださる、そして、私たちのうちに働いておられる神のすばらしさが明らかにされて行くのです。こうして私たちは生きるのです。私たちが明らかにするのは全能の神です。ヤコブが私たちにチャレンジするのは、あなたの宗教は価値あるものですか？ということです。2：12には「**自由の律法によってさばかれる者らしく語り、またそのように行ないなさい。**」とあります。これはクリスチャンのことです。クリスチャンらしく語り、クリスチャンらしく行なって行きなさいと言うのです。3：2からは「**私たちはみな、多くの点で失敗をするものです。もし、ことばで失敗をしない人がいたら、その人は、からだ全体もりっぱに制御できる完全な人です。**」と言って、ここから舌について、ことばについての教えをして行きます。ヤコブは繰り返して私たちに対して責めて来るのです。「9 私たちは、舌をもって、主であり父である方をほめたたえ、同じ舌をもって、神にかたどって造られた人をのろいます。10 賛美とのろいが同じ口から出て来るのです。私の兄弟たち。このようなことは、あってはなりません。」と、ヤコブがこのように言ったのは、兄弟姉妹たちの間でこのようなことがあったからです。4：11では「**兄弟たち。互いに悪口を言い合ってははいけません。自分の兄弟の悪口を言い、自分の兄弟をさばく者は、律法の悪口を言い、律法をさばいているのです。あなたが、もし律法をさばくなら、律法を守る者ではなくて、さばく者です。**」と、互いに悪口を言ってはならない、人をそしったり中傷してはならないと、しかも、これはその人に面と向かってする罪ではなく、その人がいない陰で言うことでした。このようなことをしている人、そのようなことをしたいと思っている、その心を持っている人に、あなたの心はサタンが持っている心と同じだと言うのです。だから、私たちは自分のことばも心も注意を払わなければいけないと言うのです。そして、5：9には「**兄弟たち。互いにつぶやき合ってははいけません。さばかれな**
いたためです。」と、これも実際に口にするというより、心の中でこのような思いを抱いてしまうことと私たちは前回見ました。心の中の怒りであり不満です。そして、11節にはヨブの忍耐のことが記されています。ヨブのことが特筆されています。確かに、ヤコブはこのヨブの話をするによって、彼が大変な試練の中にあっても神を見上げて生きたこと、その信仰に対して神はすばらしい祝福を与えたのだということを読者たちに教え、それによって読者たちがいろいろな試練の中にあってもしっかり主を信頼して生きて行くようにと、彼は励ましたかったのです。それも前回見たことです。

同時に、12節でまた「ことば」についてヤコブは教えるのです、いつも正しいことを話し続けて行きなさい、ことばにおいて失敗してはならないということ言うのです。ヤコブがここでヨブを引き合いに出したのは、彼がほんとうに神を信頼して生きたことに神が祝福を与えたということ話を読者を励まそうとしただけでなく、ヨブ自身の生き方そのものが、私たちがヤコブから今教えられていることに関しても、大切な例であるからです。というのは、ヨブが大変な事態になったとき「**ヨブはこのようなことになっても罪を犯さず、神に愚痴をこぼさなかった。**」（1：22）と、このようでした。2：9を見ると「**すると彼の妻が彼に言った。「それでもなお、あなたは自分の誠実を堅く保つのですか。神をのろって死になさい。」**」とヨブの妻は言います。これに対してヨブは「10 しかし、彼は彼女に言った。「**あなたは愚かな女が言うようなことを言っている。私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわざいをも受けなければならないではないか。**」ヨブはこのようなことになっても、罪を犯すようなことを口にしなかった。」、ヨブが神に祝されたのは、常に神に

信頼したからだけではない、彼はことばにおいて神に罪を犯すことを憎んだからです。大変な境遇にあって、もしヨブが愚痴を言っていたとしてもだれも彼を責める者はいないと思われるような中でも、彼は決して神に愚痴を言わなかった、神に罪を犯すようなことを口にしなかった、こんな信仰者だったから神は彼を喜んだのです。ヤコブが私たちに教えてくれることは「あなたの語ることがいつも真実であるように、常に正しく、神に対して人に対して罪を口から出してはならない」ということです。

新約聖書の中で、パウロが今私たちが学んでいることに関連しておもしろいことを言っています。「神は私の証人だ」と言っているのです。Ⅱコリント1：23「**私はこのいのちにかけ、神を証人にお呼びして言います。私がまだコリントへ行かないでいるのは、あなたがたに対する思いやりのためです。**」、また、同じⅡコリント11：31では「**主イエス・キリストの父なる神、永遠にほめたたえられる方は、私が偽りを言っていないのをご存じです。**」と、私が真実を言っていることを証明してくれるのは神だと言っています。ガラテヤ1：20には「**私があなたがたに書いていることには、神の御前で申しますが、偽りはありません。**」。ピリピ1：8には「**私が、キリスト・イエスの愛の心をもって、どんなにあなたがたすべてを慕っているか、そのあかしをしてくださるのは神です。**」と、今四つのみことばを挙げましたが、みな、パウロは「神が私の証人だ」と言っています。パウロがこのように神を自分の証人にしたのは、つまり、彼は自分のことばには責任を持ちますということを言っているのです。なぜなら、神が私の言ったことが真実であることを証明してくれると言ったとき、それが嘘だったら神に対して罪を犯したことになるからです。パウロはもし私の言ったこと、それが偽りであったり約束を破ったときには、私は神のさばきを切望すると言うのです。そのような思いで私たちは語るのでしょうか？パウロのメッセージを聞くと、彼がどれほど自分のことばに注意を払っていたのかということを見ることができます。そして、あなたもそのようにできますか？と問われると、ちょっと…？と思ってしまう位、私たちは自分のことばに注意を払っていないのかもしれません。

バークレーという神学者がユダヤ教の特異な教派、主流であるパリサイ派やサドカイ派はよく知られていますが、そこに属していないエッセネ派についてこのようなことを記しています。「もし他人が、自分に真実を語るように求めるなら、自分は信頼する価値がないとすでに烙印を押されているのであり、すでに非難的になっているのだ。」と。エッセネ派は「誓い」をすべて禁止したと言うのです。つまり、私たちが誓いを立てて話さないといけなく、そうでないと信じてもらえないということは、あなたの言うことはいつも真実でないということを経験しているからだ、だから、誓うなど言うのです。言いたいことは、誓わなくてもいいように常に真実を話さないと、そのように教えるのです。

してはならないこと、するべきことをヤコブは教えました。誓いを立ててはならない、それに代わってあなたはいつも真実を話さないと。なぜ、そうするべきなのでしょう？

3. 常に真実を語ることの理由

最後にこう書いてあります。「それは、あなたがたが、さばきに会わないためです。」と、さばきがあるということです。だから、あなたは自らのことばに注意を払いなさいと言うのです。このこともヤコブは私たちに繰り返し教えてきてくれました。この5章の最初のところでも、私たちに造ってくださった創造主なる神を忘れて自分勝手に、好き勝手に生きている人に対して、神は警告を与えました。まことの神よりも金を愛し、この世を愛して生きている人々に対して、あなたたちの罪はさばかれるのだという警告を与えました。2：13で「**あわれみを示したことのない者に対するさばきは、あわれみのないさばきです。**」と、このように言っています。つまり、神があわれみを示してくれているのに、その神のあわれみ、赦しを拒んでいるなら、あなたに待っているのは神の容赦ない、あわれみのない審判だと言うのです。あなたが犯した罪を正しくさばくというそのさばきです。地獄へ行きます、永遠の刑罰が待っています、そのことを神は知っているから救い主を送ったのです。地獄へ向かっていた私たちをあわれみ、そこから救い出すために救い主が来られたのです。ここまで神は私たちに対して愛とあわれみをもって接してくださっているのに、私たちが言うのです、そんな救いなど必要ないと。その人には救いはありません。その人にあるのは、その人に最もふさわしい永遠のさばきだけです。その選択を今あなたがしているのです。神があなたのことを愛していないのではありません。神があなたをあわれんでいないとか、あなたのことを省みておられないとか…。とんでもないことです。神はあなたを愛して、あなたをあわれみ、省み、あなたのすべての罪を知った上でそれを赦そうとしてくださっている、しかし、あなたがそれに対して必要ないと言っているのです。だから、ヤコブは繰り返し警告したのです。そのあわれみを拒んだ者にはあなたに一番ふさわしいさばきが待っていると。神を信じていない者に対するそのさばきを教え警告したヤコブは、クリスチャンにもそのことをしっかり覚えて目を覚まして生きようと警告するのです。私たちクリスチャンも永遠の地獄に行くことはないけれど、神の前に立ちます。そして、私たちの地上におけるクリスチャンとしての生き方に応じて、神からの報いをいただくその日が来るのです。その日が来ることを知っているあなたは、その日に備えて今日生きているかどうかと、ヤコブは繰

り返しチャレンジを与えました。あなたはその日に備えて正しく生きていますか？あなたは自分のことばに注意を払いながら生きていますか？あなたの心をいつも正しくきよく保つように生きていますか？あなた自身のクリスチャンとしての生き方を見て神は喜んでおられますか？

パウロもペテロもヤコブも皆、私たちと同じ罪人です。彼らはこのようなことを言いましたが、彼らも失敗したのです。罪を犯したのです。しかし、彼らと私たちがどこか違うとするなら、彼らは失敗をしてもそれを神の前に告白して、正しく生き続けようとしたのです。私はこのように神に喜ばれる生き方をして行きたいと、そのように決心してそのように生きようとしたのです。問題は、私たちがそのような生き方をしようとしているかどうかです。クリスチャンである私たちはそのことをしっかり覚えて生きなければならない、眠っているなら目を覚まさなければいけない、立ち止まっているなら歩き始めなければいけないのです。残された地上のわずかの時間を私たちは主のために生きようとするのです。でなければ人生はもったいないです。

正しく生きて行きなさい、正しく歩んで行きなさいと、ヤコブはここで言うのです。だから、誓いをしないで、いつも誓わなくても人々があなたを信頼するように、真実だけを話して行きなさい、そのような歩みをするなら神が喜んでくださるのです。先ほども挙げたバークレーはギリシャの偉人たちの考えについてこのように記しています。「ギリシャで偉人たちは、ある言明に対する最善の保証は誓いではなくて、それを行なう人の人格によるものだと信じている。そして、自分に対してはだれも誓いを求めようとはせず、自分が常に真実を語ることを人々に信じてもらうようになるのが理想である。」と。今話しているそのことです。だれも私たちに「ほんとうですか？誓って言ってください、本当だと！」とこのように疑われるようなクリスチャンとして生きるのではなくて、あなたの言われていることを信じます、なぜなら、あなたはクリスチャンだからと、そのような生き方をしなさいと、それがヤコブが私たちに教えてくれることです。しっかりと自らの心を、そして、あなたのことばを吟味してください。